

「春子」と「暁の寺」の間の虚空

— 三島由紀夫の Lesbianism の位相についての一仮説 —

大森 郁之助

三島由紀夫の文学に於ける Homosexuality の二種類、男性間のそれと女性間のそれとのあり方を対比して、例えば『三島由紀夫事典』(昭51・1 明治書院刊)の〈同性愛〉の項は

三島はもっぱら前者に関心を寄せていた。(略)女性の同性愛を描いた典型的な例としては『暁の寺』の久松慶子とジン・ジャンをあけることができる。この場合は、二人の同性愛の行為に照明があられているだけで、心理的な屈折はまったく説明されていない。なお、三島自身が男色と美の関係を論じた興味深い所説は『禁色』にもっともよく表明されている。(引用文省略)この記述で、三島が男性の同性愛に美を見いだしている点は特に注目ししよう。

(この項、ミナコ・K・マイクウイツチ氏)

とする。この種事典の記述というものは、通常、同じ執筆者の論文の類に比べて独自の見解を抑え、通説を立て、非個性化を心がけると思われるので、一つの標準的認識と見て例にとると、ここでは

① トータルとしての、ペダラスティの優位

② (右のこの内訳として?) 代表的なレズビアニズムの作品での、心理面の欠落

③ (同) ペダラスティの美の主張の存在
が指摘されているわけだろう。

この中、①の総括は、本項目の冒頭近くでいきなりそう結論を示したり、その論拠として(?)は②③の部分的な事情に注意を促すにとどまっている。ということとは、殊更論拠を挙げて説明するまでもない、三島文学についての通念ということなのだろう。たしかに、それまでの〈才気走った、器用な、しかし小型の新人〉といったイメージを打ち破って初期のと云わず生涯を通じての代表作の一つとも成った「仮面の告白」(昭24・7 河出書房刊)の「私」は、同級の逞しい少年の腋窩の豊饒な黒い草叢「を見た瞬間から erectio が起つて」しまうのに、自分の腕の中で「息を弾ませ、火のやうに顔を赤らめて、睫をふかぶかと閉ざしてゐる少女の「稚なげで美し」い唇には欲望を感じず、それを自分の唇で覆つても「何の快感もない」」。この作品の翌々年の「禁色」(昭26・1) 10『群像』、27・8 28・8『文学界』には、「体は女を愛することもできるけれど、(略)生れてから、女をほしいと思つたことがない美青年南悠一が、作者の「二人の分身」(野口武彦氏)の一人として登場する。ペダラストたちは作者と強く結びつけられており、かつ、三島の

作品史に於てこの二作に置かれているウェイトは大きい。

しかし、そうした、作家三島の早い時期に突如として起こったペデラステイ・モチイフの大攻勢だけを取上げるのは、公平であるまい。その一方では「仮面の告白」の既に二年前、作者自ら後年「只今（昭和四十五年段階？）大流行のレスビアニズムの小説の、おそらく戦後の先駆」（新潮文庫版『真夏の死』解説）と自負してみせる「春子」（昭22・12『人間』）があつたし、また、前出「豊饒の海」第三部「暁の寺」でのレスビアニズムのクライマックスは三島の自決の半年前の発表（昭45・4『新潮』掲載分）である。つまり、時間的分布に関しては、より早く作品化され、そして段違いに長い寿命を保ったレスビアニズム（ペデラステイの方は「禁色」で終りといつてよからうから、その差十数年）の方が、はつきり優位に立っているのである。

また、「仮面……」の同性執着は（どうにもならない性向）といった意味で異性に向けての努力をも断念せしめ、その意味では容認されて終っているが、「禁色」では、南悠一は男色家であり続けながら妻との家庭生活も堅持しおせる。悠一を困にして女性への復讐を図った老作家檜俊輔（もう一人の分身）は自分が悠一を愛し始めたことに気づいて自殺する。悠一・俊輔いずれの身の上に於ても、同性執着は少なくとも全的には容認されていないとすべきではないか（野口武彦氏はより積極的に「異常」者の「社会復帰小説」とよんだ）。参考までにごく早い頃の習作或いは全くのエンターテインメントも併せ眺めるなら、「中世」（昭20・2、21・1『文芸世紀』）の能若衆菊若は足利将軍義政・義尚二代にわたる寵をうけ、靈海禪師を囚にしながら、結局巫女の綾織と出奔、入水して果てる。一方、「肉体の学校」（昭38・1〜12『アドモアゼル』）で生活のため（？）には「六十のぢぢいと、六十のばばあとも」寝たと自ら言うゲイボーイ千吉の、「謎の魅力」を霧散させるきっかけとなる写真は、「あらはな表情をうかべ」た千吉と「顔は見えない禿頭の男と

の、いろいろな姿態を示し」たものであった。もつとも、女主人公が青年を見限るのは直接には怪写真をつきつけられた後の彼の態度であつて行為（があつたこと）自体への忌諱ではなく、又、ここでの男性間交渉はいわゆる愛情などとは縁遠いものとは思われるが、それにしても行為自体としては三島にとつてこういう使い方も出来るものだったということとは、留意に値いしよう。

だが、そうした右顧左眄（？）は、同性愛露見の直後帰国してしまうタイの王女ジン・ジャンや既に未亡人である（春子）には、ない（「男は不潔だから」と処女懐胎的な赤ん坊を欲しがった相愛の二女性がその子の死で絶望、自殺する「果実」（昭25）の単なる愚昧による破滅は、同性愛の容認否認とは問題が違う）。

そうはいつても又、男性の場合と女性の場合との、作品として形象化された量、という少々味気ないが（量感）を比べてみても、「仮面の告白」「禁色」の二長篇に対するに「暁の寺」のジン・ジャン（久松慶子モチイフは、現象的（≠客観的）には（三島自身がなした意味づけについては後述）同巻後半部の一構成要素を出でず（それとして表われているのは第四十四章の一部で、四百字詰約六枚分）、また、文学的価値という云い方はかなり曖昧かつ漠然としてはいるが、「仮面……」の声名との逆転などはまず考えられないことではある）。

だから、いずれが優位かということだけをワン・センテンスで示そうとすれば『事典』の記述（例えば）のようにしかなるまいが、しかしスポーツ競技などと違って優劣が決まればその余はどうでもよいといえるわけのものではなからう。

たとえば前記『事典』から立項した中の②など、特別の事情がない限り現代小説の常識外と見咎めるのが常識である筈で、三島が《なぜ》そうしたのかという理由の究明は直ちに望み難くても、《どんなふう》にそうした形象（異常形象）が成立しているのか、くらしい事実確認・整理

は可能なのではないか。そしてそれらが曖昧な俣では、顧みて他をいうようだが、三島文学のより重要な要素（であろう）としてのペダラスティも相対的把握は不全なままに——いわば独善的認識の危険を蔵したままにうちすぎているものとせざるを得まい。

『事典』では女性の場合について唯一の特記事項である（「暁の寺」での「心理面の欠落」という現象が生じた、直接の事情は、わりあい単純に納得できる。先程ジン・ジャンと慶子とがそれとして表われてくると云った四十四章は、本多繁邦が隣室の壁の穴から二人の寝室を覗き見た途端「はなはだ複雑に組み合わせられた肢体が、すぐ目の前のベッドにごめいてゐた」のであるから、極端な通俗小説風ご都合主義的（逆に、超前衛小説的でもないが）な視点の移動でも敢行しない限り、時間的・物理的に、二人の心理描写乃至説明が割り込むのはかなりの難事である（未明に突然の起火で庭前に逃れ出たジン・ジャンが「全裸で椅子に凭れた」慶子の写真を「よかつた。これが焼けないで」と「白い微笑の歯を焰にかがやかせて慶子を見上げ」る、というのは、「屈折」も何も無さすぎて、心理と云い立てても余り意味があるまい）。

そして、この場面以前の二人の交渉は

○本多の別荘を訪れたジン・ジャンが、本多家が留守のため、隣接の慶子の別荘で休息させてもらう。

○本多の別荘に泊まって慶子の美貌の甥に迫られたジン・ジャンが、本多邸を逃げ出して慶子の別荘に仮泊させてもらう。

という二件しか書かれていず、それぞれの折の二人のやりとりは前件が慶子からの電話（二十九章）、後件がそれを慶子から聞いた第三者の噂話（三十七章）及び玄関先での慶子の説明（三十九章）という形で紹介されているのだから、ここでも形式の制約上二人の心理は表われ難い。つまり、〈心理の欠落〉——心理抜きでむきつけにこのシーンが示されるの

を止むを得ないことと受け入れさせるように仕組まれている、といえよう。

また、より本質的な事情としては、ジン・ジャンはかつて本多がタイに渡って謁見を許された時には自ら日本人の生まれ替わりだと語り日本に連れ帰るよう泣き叫んだのに、成長して来日した今はそれらの事を全く覚えていないと言い、早世した親友松枝清頭の生まれ替わりかという期待と一種の思慕を交えて執着する本多を、不即不離というよりはやや冷い恬淡さで、悪意にとれば小妖婦風に、あしらい続けて来た。つまり本多にとつてのジン・ジャンは、本多の側にも原因はあるにせよ不可解な異国の美姫としてあり続けて来たのである。そして作中では殆どその本多の目から捉えられているのだから、ここで突如としてレズビアンとしての心理のみが開示されたりしたら何とも妙なものであろう、そういう人物なのである。

以上、〈心理面の欠落〉という把握が読みとり方の問題などではないことを述べたのだが、こうした形象は

これ（「暁の寺」）は死と頽廢の巻で、（略）一人の少女を、完全に肉体の側だけから書きました。

（昭45・3、坊城俊民氏宛書簡）

といった〈自註〉からも、三島の意図に即したものと解されよう。そして、そうした〈偏向〉はこのモチーフの意義＝篇中での役割の軽少を意味するものでもなかった。叙述の分量は右の突然展開するクライマックスに絞れば「暁の寺」全体の1%にも足りないのに、

第三卷（「豊饒の海」の）はレスビアニズムの小説ですが、その筋を立てたのは四年前のこと（略）

（昭44・3付、同前）

と、巻全体の宿願の主題扱いされ（前引書簡もその趣はある）、遺稿の創作ノート（昭46・1『新潮』臨時増刊「三島由紀夫読本」収）では

お姫さま、(略)戦後日本へ来る。聡子とそっくり同じ顔の女に惚れる。／レスビアニズム。

姫 日本へやつてくる。聡子or第二巻の女とよく似た女とLesbian Love。(略)レスビアン・ラブの失恋。——帰国。

姫のレスビアニズムの徐々たるあらはれ。／聡子にそっくりな女性の出現。月光姫これに惚れる。

と、再三、想を確かめられている。しかも、実現した現行本文でのジン・ジャンの相手役の慶子は第一巻のヒロイン綾倉聡子とも、また、第二巻の女——とよばれるべきは鬼頭楨子か? とにかく聡子は二巻には登場しないのだから別の女性——とも、べつだん似てはいないのだから、要するにジン・ジャンは相手が誰であるかは(従って、そうなる経緯も)二の次にして、何はともあれレスビアン・ラブを演ずることを課せられていたというわけである。このモチイフに対する三島の執心の程が窺われよう。

このように、少なくとも「暁の寺」に関する限り、三島にとってレスビアニズムは(心理)抜きに全く肉体的なものであっても猶、十分に重いモチイフであり得た(——ペデラスティとの、相違?)わけだが、しかし、三島作品のレスビアニズムが常に行為だけ、肉体的だけのものだったというわけではない。

もつとも、先に断っておくと、それが三島文字の一つの特色であり屢々魅力でもある、云い回しは凝っているがひどく裁断的な「心理追求ではない」「心理規定」(村松剛氏)を一方の極とし、肉体の動きのみに徹した描出(ジン・ジャンと慶子のような)を他の極として、或る場面なり作品なりがそのどちらの版図に帰属するかという分類や境界線の引き方は、簡単ではあるまい。しかし例えば前出「果実」(昭25・1『新潮』)の

逸子が一刻も傍らに居ないと、弘子は恐怖に息もつまりさうな思ひ

がするのである。

とか、

極度に愛し合つて、しかもその一風変つた愛が袋小路のやうな梗塞された構造をもつてゐるので、愛し合へば愛し合ふほど足掻きがとれなくなる。

時によると、喪心の体で小一時間もものを言はずに(二人で)坐つてゐる。

等の叙述が(行為)よりは(心理)に分類されるべきところを対象としている、とはいえよう。

しかし又、(心理的)といえるのと(精神的)とよびたいのは多少の差がありそうで、右の「果実」の二人は学友の悪戯で望み通り男との交渉なしに授かつた赤ん坊に玩具を与えずに神経を惑乱させ、結局、「重篤な消化不良症」で入院三日目に死なせてしまう。こうした露骨な愚弄は、一人称の「仮面の告白」の主人公自身については勿論、全体にシニカルで主人公達に対してもかなり酷薄な「禁色」にも見られない。つまり、同性愛者である主人公達への親身さの度合いの点で、男性の場合との差は「果実」にも存する、といえそうである。

だが、レスビアニズムの最も早い作品「春子」では、差違はさらに減ずる。(心理)とよび得るものは全篇に見られて一部の抄出はかえつて歪んだイメージを伝えてしまう恐れもあるが、例えば、春子の甥の「私」が春子に教えられて春子の義妹の路子のアパートを訪れた時、

「宏さんね——闇のなかから意外に落着いた声がこたへた。「ええ」

「お姉さまが行けと仰言つたの」「ええ」「さう、それならいいわ」
今まで路子に「ええ」などといふ返事をしたことのない私だが、この応酬はあまりに神秘なものと思はれたので、他の返事のしやうがなかつた。

とか、部屋に上げてから路子の言う、

「私何でも知つてゐるのよ。あなたとお姉様のことだつてみんな知つてゐるわ。(略)ただ私、お姉様の云ふことを決してそむいたことはないのよ。お姉様がやれといふなら何でもして来たわ。これからだつてお姉様のやれといふことは何でもするわ。あなたのことだつて、あなたを好きになれつてお姉様が命令したのよ」

とかは、二女性の間を、——(行為)でないのは勿論だが、さらに我々の身辺・日常の(現実)との乗離によって、(精神)とよんでも余り抵抗のないものとして、うけとらせようか。

制作年代は逆行するが「近代能楽集」の一篇「班女」(昭30・1『新潮』)で、男の再訪を待つ「きはめて美しい」狂女を家に引き取り「あなたの裸かが好きだわ。あなたみたいに純潔で豊かな裸かを見たことがない」と賛美する老嬢の日本画家は、「誰にも愛されない」から「何も待」たなかった自分の夢は

「(略)私以外の何かを心から愛してゐる人を私の擒にすること。

(略)私の望みのない愛を、私に代つて、世にも美しい姿で生きてくれる人。その人の愛が報いられないあひだは、その人の心は私の心(略)」

なのであつて、「あの人(狂女)のほそぼそとした望み、あの人のもすれば消えさうになる燈芯に、毎日希望の火を点けるのが好き」だ、と告白する。一方的かつ甚だ歪んだこの愛着は、同性愛のとは謂い難いとしてもその周辺或いは近似のものとして、しかも(行為)や(現実)からの乖離度では「春子」以上の事例を加えよう。

そこで、さきの(行為偏重—心理(—精神)欠落)というペデラスティとの格差(?)は、三島のレズビアニズムのすべてではない、全く同等とは云い難くても(そこまでの断定は常に困難である)とくに格差という程ではないケースもある——と中間の纏めをすると、ではその二つのケースを分ける条件の差は?ということになるが、ついでに、そこ

に(美)が主張されているか否かというもう一点の(格差)要素(?)について見ておくと、この点でも、「暁の寺」の「白いふくよかな体と浅黒い体」二つの裸身が「頭の方向を異にして、放恣の限りを尽してゐる動きと表情とは、官能性と異物感のあわいとでも謂わねばなるまい。例えは

燃えてゐるなめらかな腿と燃えてゐる頬が睦み合ひ、柔らかい腹が月夜の湾のやうにしのびやかに波立つてゐた。

もつと近く、もつと密に、もつとお互ひに融け入りたいとあせりながら果たさず、ずつと彼方で、赤く染めた慶子の足の指が、一本一本の指の股をひらいたり閉ざしたりして、まるで熱い鉄板を踏んだやうに指は躍つてゐるのに、それが結局、空しい薄明の空間を踏みしだくことにしかならないでゐた。

岸壁を舐める夜の小さい波音が断続してゐた。

たえず揺れる肉の円墳の上に乳首はまどろみ、汗が、この赤土の新らしい円墳に明る雨の光沢を添へた。

^(註3) だが「春子」はそうではなかった。

呆れるほど長い風呂だったが、その間に湯殿の前をとほつたとき啜り泣きのやうな含み笑ひのやうな妙な物音が湯殿からきこえたのが気にかかつてゐると、廊下に突然乱れた足音がした。(略)むつと湯上りの匂ひが鼻を搏つた。春子はわけのわからない微笑で私に目じらせたが、傍に立つてゐる路子の腕に春子の腕がしつかりからみ合つてゐるのを見ると私はどきりとした。それよりも、いたいたしく頬笑んでゐる路子の、麻のやうに血の気のない顔に氣附いて戦慄した。／「脳貧血よ、軽い。一寸そこへ座蒲団をならべて頂戴。寝てゐる方がいいから」(略)私は路子の頬に頬を近寄せた。陶器のやうな冷い頬の気配がした。死が魅するやうな仕方それが私を魅した。つまりそれに身を委ねた途端に、私が私でなくなるやうな。

とか、またその続きの

嘘のやうに頬に紅味がさして、ひらかれた目が私の方へ笑ひをふくんだ視線を迂らせながら叔母を見上げて、／＼「わたし、もう起きるわ。ねえ、起して」／＼路子は毛布で包んだ肩を姉により、かからせて食卓についた。さすがに何も喰べなかつたが、葡萄酒を少しづつ舐めてゐた。顔はふだんよりも明るんで、齒並びの美しい白さがはじめ目立つた。ときどき春子の肩に顔をもたせかけてちつと目をつぶつてゐることがある。すると春子も酔ふやうな顔つきになる。路子は又ふいに目をあけて、その栗のふくませを頂戴などと言つた。

とかは恐らく風呂場での「暁の寺」に近い事の後なのだが、こちらの描き方は甘美と評してよからうし、少なくとも甘美に描こうとした作者の意向は伝わって来よう。さらにその後日、荒れた温室の中に「私」が垣間見た光景――

路子はいつものスーツで、椅子のうしろに立ち姉の肩に両手をまはしてよりかかつて一緒に雑誌を読んでゐる様子だが、隈ない日ざしのためでもあるまいが、何かぐつたりして溺死人が負はれてゐるやうな恰好に見える。ふと路子は体をそらして、手はやはり姉の首にまはしたまま、すこし遠くから春子の白い豊かな衿足をぢつとみつめた。そのみつめてゐる間がずるぶん長かつた。そのうちに頬から耳へながれるやうに紅潮して来たかと思ふと、がくりと顔を姉の衿足の上へおとした。そして小犬が寝藁の中へもぐりこむやうに、頭を重たげに瘻學的にゆすぶりながら、額で春子の髪をこすり、白い衿足へ頬をすりつけたり頤をすりつけたりしてゐたが、いままですくあいてゐた睫毛の美しい眼の尻に幸福さうな微笑を刻んだかとおもふと、その眼をきゅつと閉ぢて唇をきつく衿もとの皮膚に押しつけた。春子はまるでさうされてゐるのを知らないやうにぢつとしてゐた。そして同じやうな長い睫毛を伏せてうなだれてゐた。卅

秒ほど二人はそのまま動かなくなつた。ただ少女の細い指がかかる爪を立てて、微妙にふるへながら春子の肩を撫でてゐるだけであつた。

――かうして卅秒ほど経つたとき、春子はぐつと寝起きの時のやうに目をつぶつたまま頭をのけぞらせて、あげた両手で路子の頤をさぐりあてると荒々しくその顔を自分の顔の前へもつて来た。路子は体をねちまげて左手を春子の膝のあひだにつよく突いた。

という、「それからその（路子の）左手がはげしい動きで姉の裾をかき立て」るのを目撃してしまふ前段の描写も、また同様である。

もつとも、「禁色」での男子同性愛の（美）の主張というのは、実際に或る交渉（や、その主体）が美しく描かれるよりも原理的に美である（善な）のだと論じられてゐるところに、特色があるう。

『略』 男色といふものは、純潔な快楽に基調を置くものらしい。男色絵のあの眩しいやうな奇矯な歪曲は、純潔の苦悩の表現なのにちがひない。男同士はいかにしても汚れ合はず、相手を汚し合へない絶望にかられて、あんないたましい愛の姿態を演ずるにちがひない（九章）

というのは「何も知らない老作家」俊輔が悠一と美少年達のやりとりを見た時の早合点として云われてゐるわけだろうが、それとは違つて諧謔と疑うわけにはゆかないところの

男性固有の美について敏感なのは男色家に限られてをり、（略）はじめ正常な少年も、ひとたび男色家の熱烈な讚美に会ふと（女はこれほど肉感的な讚美を男に与へることはできない）、夢みがちなナルシスに変貌する。（略）彼（先天的な男色家をさす）の理想は、肉感と観念の未分化なあのまことの天使、（略）宗教的な官能性を完成した東方神学の理想に似てゐるのである。（七章）

といった正面切つた演説は、「春子」をも含めて女性間に関しては見当たらない。この、いわば理論的武装の有無の差は、作者或いは予想され

る読者にとって女性美及び女性間交渉の美は自明だった（自明と想定された）ためか、それとも、それも可能性として含めて、これらの作品の構えの大小といった、より総合的な問題か（女性及び女性間交渉を〈美〉として論ずる自信がなかった、とは、前引作品本文から考えられない）。理由はともあれ（尤も、ことによっては、理論づけを要した男性の美の作者にとっての親疎真贋が改めて問われることになるかも知れないが）理論の存否という差は確かに差として、しかし、それと、ともかくも〈美〉の存否ということとは、また別の問題である。

——さてそこで、「春子」と「暁の寺」との差、また「果実」の蚊帳の中からけたたましく逸子の名が呼ばれる。眼をさました弘子は裸のまま寢床に坐つてゐた。

不意に弘子が歎歎に近い不明瞭な鼻声を洩らして、逸子の肩に頭部を凭せた。髪感触が逸子の頸筋を戦慄させた。／「どうしたのよ」逸子が正面を向いたまま故ら無感動に訊く。／「どうもしないわ」／「変な人ね」／「お姉さまもね」 （傍点引用者）

といった、しらけぶり（又は、荒みぶり。最後の弘子の台辞など全くの売り言葉に買い言葉でしかない）との差は、何に因つて生じているのだろうか。

「春子」とそれ以外の作品との構造上の差違としては、まず、

①視点或いは話者の設定（——の差違）

が、思い当たろうか。「果実」は三島が頻用する何でもお見通しの超越者的視点から鳥瞰洞察されており、「暁の寺」は本多繁邦の目を通して描かれている場合が多い（ジン・ジャンに関しては殆ど）が、その本多の認識自体が超越的視点にさらされている。それに対して「春子」は登場人物の一人である「私」の見聞と語りという形をとり、その「私」はまだ十九歳の、しかも春子に求められつつ路子を想っている、二人に対して突き放した観察をし難い身である。レズビアンへの捉え方が甘くなっ

てもおかしくない条件は二重三重に具わっているといえよう。

しかし、視点（話者）の設定は描かれる対象語られる事柄に合わせてなされることだろうから、

②主たる描写対象、即ち春子という女性（彼女がリードしている関係だから）の特性

は、何か？ となると、その最大のものとは春子が生家のお抱えの運転手と駆け落ちして後に戦死された未亡人、という、一人だけ（男を愛した（ことがある））点になるのではないか（久松慶子も結婚歴はあるが）とつくの昔に離婚してゐた」という云い方から春子の〈結婚〉との意味の相違は明らか、かつ、中心はジン・ジャンの方である）。

その上春子は作中の時点では「私」とも体の関係がある（慶子にも「アメリカ占領軍の若い将校」がいるが、「このところ彼女の情人は……であつた」（傍点引用者）という云い方、同前。つまり、レズビアニズム専一の女性（の、レズビアン・ラブ）は〈心〉を抜きにされるか又は擲擻され、バイセクシュアルの女性（同前）のみが〈心〉を伴ない。かつ、それなりに〈美〉として、つまり男性間の場合に準ずる扱いで、描かれている——ということになりそうなのである。

そう考えて観ると、徹底した同性専願（前述）の「果実」の二女性は赤ん坊を死なせてしまう愚行に照応して容姿も「眼鼻立ちの明瞭すぎる大柄な美貌」「手足も大きくて舞台へ出たら目立ちさう」とか「小柄で無口で、顔の造作もちまちまと」（傍点引用者）と差引かれ、「班女」の女主人公の老嬢（同性愛の主体）も美化されているとは云い難いが、老嬢に愛される側の元々男を恋して狂った芸者の方の妄想は、童話風に愛らしくいたわらわれていると謂えよう。

それでは男性体験が何故それほど意味を持ち得るのか、ということになると、すぐには見当もつかまい。三島には「女ぎらひの弁」〔昭29・8『新潮』〕という、「ウーマン・ヘイティングの男の論理」を「わかり

すぎてばかばかしい」ほど「セオリーどおり寸分狂いもなく」(上野千鶴子氏、平4・1筑摩書房刊『男流文学論』)述べ立てた一文があつて、最後は「もつとも女が自分の本質をはつきり知つた時は、おそらく彼女は女ではない何か別のものであらう」と結ばれているが、(男を愛した)ことが女性にとって自分の本質の悟得⇨変質・昇格をもたらし、異なる(男性なみの)扱いを妥当たらしめる、などといった安手の恋愛小説もどきのロジックを、三島が蔵していたとも想像し難からう。

しかし、そうした意識的乃至意図的な、いわば積極的な描き分けではなくて、受身の感覚の上で、二種の女性——というよりもそれぞれの女性の同性間交渉——が一視同仁たり得なかつた事情といったことならば、やや想定が可能になるのではないか。それは次のような意味に於てである。

いささか誤解を招きそうな比喩だが、ポルノグラフィは読者が自分を代入して読み得るし、ストリップ・テイーズは男性ならば自分を空間に幻視して鑑賞もできよう。しかしレズビアニズムは、男性にとつては自分がそのまゝまるごととは関わり合つて行けない主題ではあるまいか。小説中の人物と一体化して我が身の上の事のように泣いたり笑つたりするのは低級な読者であつても、逆に全くの風馬牛、或いは昆虫記の世界でも見るようにしか見ないのも又、作中世界へのオーソドックスな対応ではないとすれば、レズビアニズムに対して男性が正統的な対応をなす(作者としてでも、読者としてでも)には、その間、自己の性を封じ込めるといふか消し去るといふかしなければ(それが、できなければ)ならないのではないか。

こう云うと、本稿筆者自身のこうしたテーマの作品を論う資格の程も問われて来るわけだろうが、それもさる事乍ら、読者(論者を含む)と作者とでは所要の対・作品(題材)親近度⇨融け込めなければどうにもならない度合いに大差があるろう。つまり、眼前に展開された作品世界

を、ともかく読み通せば自分なりに対応したともいえる側と、それを作り出す側とは、それぞれの作業に際しての(封じ込め)の程度のみならずその性質も、その不可欠さも、比較になるまい。その後者の立場をほぼ全うしたかに見える場合、例えば、レズビアニズムの匂いのする少女小説を数多く遺した川端康成が少女達への(同化)性を驚嘆され、無責任なゴシップとしてながら非・男性説(多くは比喩としての、稀にそうではない)を囁かれた所以である。

この川端のゴシップの論理を裏返してあてはめるなら、少なくとも経歴としては(男との世界)も持っている⇨(女だけ)の感情世界にいわば風穴があいている春子のレズビアン・ラヴにのみ、正常(その作者として)な親近感を示した三島は、逆にいえば、男が全く——残像も余香も——存在しない女だけの世界には参入し得なかつた⇨川端のように自らの性を封じ又は消して対し得なかつたということなのではないか。

「仮面の告白」に、主人公が幼年時代、劇場の舞台で見た女奇術師天勝や活動写真の中のクレオパトラに魅せられて彼女ら「の扮装に憂身をやつした」というエピソードが出てくる。それとこれとは勿論「だから」でも「しかし」でも繋がりはしないが、扮装し終えて「狂ほしい可笑しさ・うれしさにこらへきれず、／『天勝よ。僕、天勝よ』／と云ひながらそこら中を駆けまはつた」主人公のように、作家三島は、ゆかなかつたということではないか。

云い遅れたが、「春子」の姉・妹と「私」とは、春子が「私」と三度の夜を持ち路子が唇を合わせた、という二辺(だけ)から成る、通常の三角形の關係にとどまらない。春子との二度目の折、夜半に『路ちやん』と遠くから呼ぶ「春子の声」の暗示が私に、私自身を路子だと感じさせ、路子独特の笑みが「幻のやうに私の口もとにただよふのが感じられ」る。また、作品の結尾で路子が「いつも寝る前にお姉様と二人で」するお化粧ごっこに、お揃ひの藤模様の女浴衣を着せた「私」を誘う。路子に口

紅を塗られて「何か別の唇が私の唇に乗り憑つた」(傍点原文)と感ずる別の唇とは春子のそれであつて、つまり「私」は、或いは春子となり或いは路子となり、女同志の關係を見ているだけでなく演じている部分もあるのである。かくして「春子」のレズビアニズムは「私」にとつては文字通り他人事ならぬ近いものになり、レズビアン達との間も性的交渉の相手としてとは又違う性質の近しきとなる。そういう特異な(——關係にある)レズビアニズムとレズビアンのみがよく三島を魅し得た(三島と和し得た)、というわけである。^(註8)

ところで、この乗り憑られを以て田中美代子氏は「戦後の女性化時代の幕あけをつげる(略)予言にみちた作品」と位置づけ、「男である『私』が次第に女になつてゆく一つの儀式を象徴している」とした(「短篇小説のデーモン」、昭40・4講談社刊『三島由紀夫短篇全集』二巻月報。傍点原文)。三島の作品史を離れて時代状況一般や、あるべかりし幻の続篇の空想ならばそうもいえるようだが、現実の三島はこの後、「儀式」を経てやつとのこと、でさえも、「女」には再びは成らなかつたことは、既に見た通りである。そして、そうした結果からみて、「女性化」はごく自然かつ容易だからこゝでも起こつたのではなく、偶々こゝでは条件が合つたから(前述)起こつたと考えられるわけだが、その前提を切り捨てるともかく、「女性化」が起こつた(には違いないが)ということのみに着目すると、それが本来的な(勿論、三島に於て)事なのか例外的なのかという点が忘れられてしまう危険もあろう。

本稿筆者は先年、川端作品のレズビアニズムが彼のペデラスティ体験に基づきその発展したものとする説の、論拠の不適切と論理の不備を指摘した(「川端康成のLesbianismとPederasty」、平3・8『国語と国文学』)が、三島にも又、本然の嗜好かミスティフィケーションの一つかは別として同種の行状があつたのは事実らしい。^(註7)その三島のレズビアニズムへの対処に於けるこの不適應ぶりは、二種の同性愛を安易に観念

上の相互乗り入れ可能視することの非を示す例証として、旧稿の補強ともなろうか。

しかしそれは今措いて三島の問題に戻ると、バイセクシュアルである春子のレズビアニズムのみを受け入れたところに、彼のホモセクシュアリテイについての

(イ) 観念的融通性の欠如(男性としての体験から女性のそれをも大まかに受容、とはならなかつた?)

(ロ) 基盤たる(と、いわれる)〈同性高潔感〉の強固さ(その同性との交渉の有無で、当該異性への親疎感に差?)

(ハ) 贖物性(イ)の逆の見方。自ら体験がある筈なのに、無理解?)

等、時に正反対の幾つかのテーゼ(まだ他にも考えられよう)の、いずれが帰納されるだろうか? ——しかしそれは本稿の主題から外れるので、いまは疑問として記しておくに留める。

さてそこで、男性たることを封じも消しも出来ないという〈欠陥〉性はそれとして、本人としてはそれなりに抒情し得たと思われる二十二年の「春子」から目を挙げて、行きついた果ての四十五年を遠望すると、こちら「暁の寺」では、「春子」と対照するなら典型的(少なくとも本来的)ということにならうそれ一筋のレズビアン・ラヴを、「春子」とは対照的に即物的(異物的?)に描いて、終っている。そしてそれは男性間の場合を基準にとれば一の変格(控え目に評しても)であることを、「事典」は注意していた。男性間の同性愛が「禁色」以後影をひそめることについては、三島が「子どもを得るためには結婚したい、だが結婚すれば男色を絶たねばならない、という二者択一を、自身自身に対する美学的などうか、倫理的な問いにして」「二度と書かないというふうにした」のだらう(上野氏、同前)という、明快すぎて恐いような説明もある。だが、これと同程度のわかりやすさで、こちら「暁の寺」での〈非情〉化——このモチイフの断念放棄とは違うが、一脈相通じるとも

思える、非情化への執心（前引書簡・ノート参照）——を説明し得るような事情といったものはいないのではないか。

とすれば、〈変則的なレズビアン（——・ラヴ）への親近（「春子」から反対の極の〈典型的なレズビアン（——・ラヴ）への異物視（「暁の寺」）へと突走って、遂に〈典型を、オーソドックスに〉描くことがなかった三島は、その本質に於てレズビアニズムの作家として不適（少なくとも例えば川端に比べて）だったのであり、不適なままに（真に男性的なままに、でもよいが）終ったものとなして、結論としては大きな誤りはあるまい。

註1 「敗戦後何年間かの三島の作品は、（略）その多くが、失恋への嘆きと自分を裏切ったものへの復讐とを主題としていた」こと（「仮面の告白」の主題の突然さ）を、村松剛氏が詳細に論じている（平2・9新潮社刊『三島由紀夫の世界』）。

2 作品の完成度とか世間に与えた印象の強弱とかを抜きにするならペデラスティの方に「仮面の告白」の前年の「殉教」〔昭23・4「丹頂」〕を加えることまでは考えられるが、さらに溯って「煙草」〔昭21・6「人間」〕での上級生への感情をもその萌芽という以上のものに取り做すのは拡大解釈のきらいがないか。レズビアニズムとの先後が一年差で逆転しても本稿の立論にはべつだん支障はないが、そこまで抜げるなら例えば「剣」〔昭38・10「新潮」〕での一年生部員の敬慕と主将の信頼の交叉は、どうなのか。どこかで思い切った一線は引かれねばならないだろう。

3 「暁の寺」では女性間の交渉だけでなく異性の間も同趣の描き方をされてはいるが、巻中ただ一ヶ所のドイツ文学者今西と椿原夫人とのシーン（二十七章）は原稿用紙一枚強でジン・ジャンと慶子との五分の一の量にすぎず、異様な描写（に終止していること）の重味に事の異様に格段の差がある。この巻全体としての性格という一般論に環元してしまう（レズビアニズムの問題として捉えない）のは、前引書簡・ノートに見えるこの巻でのレズビア

ニズムへの関心の偏向からみても、森を見て木を見ぬこととなる。

4 「この短篇（「春子」をさす）で作者ははじめて異性の肉体を描いた」と評する吉村貞司氏（昭41・9現文社刊『三島由紀夫の美と背徳』）は、その因として（であろう）、春子は同性愛によって「中年女らしい艶治さが、さらに体臭としてせまつて」来、路子も「新鮮な魅力にあふれてゐる」ものの、「私」が「征服することによつて、平凡な女の仲間になるが、行」き、「知らざる女体に対する恐怖から来る」ところの「ロマンチックな処女崇拜や抑圧の神秘的な世界」が「「春子」にはもはや」ないことを指摘した。征服した相手の「親近感」一般論から、だから春子（や路子）は、そのレズビアニズムもまた深切に描くことになったのだ、と演繹するなら本稿の労は半ば無用となるが、しかし、〈征服による親近化〉はその相手一人限りなのか、それとも対異性意識一般の変化か。恐らく後者の意だろうが、それなら遙か後年のジン・ジャンは当然（女体への恐怖・神秘感）を免れている筈で、にもかかわらずそのレズビアニズムが異物的に描かれているということは氏の指摘の援用を躊躇させる。

5 例えば山口瞳は「川端さんという人は、わりあい容易に女と同化してしまうことの出来た人ではないか」「川端さんは、少女と平気で手をつないで町を歩ける人だと思ふ。その少女愛好や少女趣味や、少女小説が書けてしまうというのは、根強い何かに根ざしているような気が」する、「稲垣足穂が川端さんを罵倒するという兼ねあいは、その意味でよくわかる」（「創意の人」、昭47・6「新潮」臨時増刊「川端康成読本」）と述べている。

6 田中美代子氏（「短篇小説のデモン」、後出）に「ここに展開される錯綜した快楽の図式」は「作者における女性的なものとの拘わり方」を「あますところなく表示している」との見解があり、女性の行動の一つとしてのレズビアニズムに限らず女性そのものに対する好尚が、三島に於ては通常のヘテロでも純粹なレズビアンでもないバイセクシュアルの個体に向かつていた（？）とすれば、「春子」の別格化はその一端として説明できそうだが、では確かにバイセクシュアルでなくて、同程度（以上）に魅力的に描かれたヒロインはいないか、という点、例えば「春の雪」の聡子は魅力的に於て劣ると断言できるか、等の疑問が出て、大原則としてそれに拠って済ませてしまおうと

いうわけには行かないようである。

7 第三者の見聞も伝えられているが、最も直接的な証言としては志賀淳氏
 「三島由紀夫との異常の性」(昭46・1・8 『週刊読売』)が挙げられる。

8 三島の〈子供を得たい〉という趣旨の発言は「禁色」完結の翌々三十年の
 対談「三島由紀夫氏の女性観・結婚観」(11 『新女苑』)で「人間は、結婚し
 たって何したって(略)そんなに幸福なんていうものはありやしない」のに
 「子供が欲しい」のは「本能なんです」と肯定したのに始まり、結婚(三
 十三年六月)直後の「僕の理想の女性」(7 『婦人朝日』)に「子供っていう
 もの」は「さぞ面白いものにちがいないと思う」と、また「作家と結婚」(7
 『婦人公論』)には「今ではほんとうに子供がほしいと思っている」とある。

なお、三島作品の本文は原則として新潮社版全集に、全集非収録のものは初出
 誌に拠った。
 (平4・9・28稿)